

ボケの雄性花に関する研究

山口 聰・国重正昭・森下昌三

(野菜試久留米支場)

ボケの花は形態的には両全花であるが、花柱の長さが0mmに近いものから20mmに近いものまで変異に富んでいる。そして、長さ10mm未満の花柱を有した花は雌性機能を欠いた雄性花であり、また、雄性花の生じる頻度は品種により数%から80%以上まで異なっている(森下・国重 昭52春園学発表)。このような事例は、植物学的には雄性同株性として知られている。今回、同一花ソウ内での雄性花の出現頻度と開花順位、および花柱長に及ぼす摘らい処理の影響について検討を加えた。

材料および方法

1977年春に「東洋錦」「玉獅子」「群千鳥」「白牡丹」「雲の峰」「開運」の開花順位ごとに花柱長を測定した。測定した結果、①5mm未満、②5mm以上10mm未満、③10mm以上15mm未満、④15mm以上の4群に分けて記録した。①、②を雄性花、③、④を両全花とした。更に「開運」を用い、摘らい処理を行い、雄性花の比率がどう変化するか観察した。開花期のおよそ2ヵ月前、つぼみが直径2~3mmのところに、5花ソウごとに1花ソウを残し、その1花ソウに1花を残すこととして、1977年春は花ソウ内で1ないし2番目、1978年春は3番目に大きいと見なせるつぼみを残すように摘らした。

結 果

いずれの品種においても、開花順位が遅れるにつれて雄性花の割合が増加していた(第1図)。「開運」の雄性花の割合は、1977、78両年の間に有意な差はなかった。摘らい処理は、両年とも両性花の割合を有意に高めた(第1表)。開花後の結実は摘らい区で20花ソウ20花のうち4果、無処理枝200花ソウにつき5果であった。

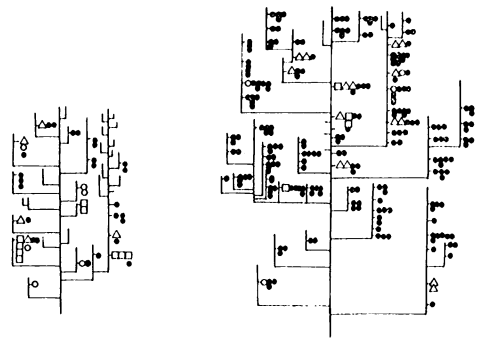
考 察

Monoecious 植物の花の性は、栄養条件、ホルモン・レベルなどによって変更される(Frankel, R. and E. Galun 1977)。ボケにおいては、同一花ソウ内で開花順

位の早い花に両性花の割合が高く、遅い花に雄性花が多い。摘らいすると両性花の割合が高まるので、花柱の発達には花ソウ内のつぼみの間での養分競合が関連しているものと考えられる。

第1表 「開運」の雄性花の割合に及ぼす摘らい処理の影響

区 分	雄性花 (%)	両性花 (%)	視 察 花 数
77年無処理全体	92	8	239
77年無処理、I・II番花の合計	68	8	180
77年摘らい	11	89	9
78年無処理全体	87	13	69
78年無処理、III番花の合計	23	6	20
78年摘らい	50	50	20



第1図 雄性花(●:①, ○:②)と両全花(△:③, □:④)、及び着花模式図(下左:玉獅子, 下右:開運)。水平方向、左から右へ開花順、縦方向は同一順位を示す。①②③④は本文参照